

4. 選択総合人間科

高校2年選択総合人間科「国際理解と平和」授業実践

榎本直子*・石川久美・川田基生

【抄録】 高校2年選択総合人間科「国際理解と平和」(1クラス、2単位)では、教師2名(1名は通年、1名は前期後期で交代)でのチーム・ティーチングにより、テーマ授業を展開した。この学習では多角的に世界・歴史・環境などを眺め、問題意識や自ら問題提起をしていく姿勢を育てることを目標に、学習方法、学習内容を検討した。

本稿は、学外講師による授業や留学生との交流、ビデオ教材の活用など具体的な総合的学習の実践報告である。

【キーワード】 総合的学習 国際理解 チーム・ティーチング 学外講師 人種差別 人権 異文化理解 国際協力 南北問題 貧困・飢餓

1. はじめに

「総合人間科」がこれまでの教科・科目ではとらえきれない現代の教育課題として取り上げているキーワードは、「生命」「環境」「平和」「国際理解」「人権」「生き方」「民族」「開発」など21世紀にむけた世界的、地球的規模の問題である。これからの時代に求められる学力は、既存の教科学力では測れない総合的視野に立った問題意識と社会認識であり問題解決能力だと考えられる。

各学年の必修総合人間科(1単位)、高校2年と3年の選択総合人間科(国際理解と平和、自然と人間、人類と平和、各2単位)、ともに複数の教師によるチーム・ティーチング、脱教科・脱偏差値・脱教室を標榜した学外講師の紹聘やフィールドワークの実施といった学習内容・方法の転換を行い、知識偏重の従来の教育からの脱皮を目指している。1997年度の高校2年の選択総合人間科「国際理解と平和」においても、他の総合人間科と同じく多様な学習方法を試みた。生徒に一方的に教えるのではなく、ともに学び考えディスカッションするところに総合人間科の楽しさがある。答えのない問題にどのように取り組みどのように理解や態度行動を促していけばいいのか模索しながら、授業構成や方法を検討していった。また、「国際理解と平和」は高校2年の必修総合人間科の学年テーマでもある。学校行事である平和学習中心の研究旅行と密接に連動した必修の総合人間科との違いを国際理解の視点を強調することで出した。

2. クラスの構成

(1) 生徒構成

高校2年 文系生徒

28名(男子6名、女子22名)

2学期より2年間の留学をするもの3名、留学から戻るもの1名を含む。

カリキュラム上、数学との選択となるため既存の教科学習にはあまり意欲の見られない生徒が多く、積極的な選択者は少数派(27人中5、6人)である。

(2) 担当教員

総合人間科は既存の教科にとらわれないということで担当する教員も全教科から毎年異なるメンバーで構成される。教科担当2名によるチーム・ティーチングで実施。

今年度の担当は、

通年：川田(政治経済)

前期：榎本(生物) 後期：石川(化学)

(3) 授業のねらい

多角的に世界・歴史・環境などを眺め、問題意識を育て自ら問題提起していく姿勢を重視する。

事前の意識調査では、教科書もなく自分達の興味にそった内容を様々な方法で学ぶことができる可能性に期待が寄せられていた。生徒一人一人の興味関心は多様でかなりはっきりした問題意識を持つ者もいたが、多くは表面的で具体性に乏しく単に他の国への観光的興味の部分も見られた。そのため、最終的には一人一人の興味関心に基づく個人研究を可能にする学習能力の獲得を目指すのが、最初はクラス全体でテーマを設定し問題意識を育てることを目標にすることにした。

(4) 生徒の事前意識調査から

授業計画を立てるにあたって事前に選択者の「国

「国際理解と平和」に対する考えや学ぶ内容と方法についての意識調査を行った。

以下にその一部を紹介する。

<「国際理解」という言葉からイメージすること>

- ・自分の国と他の国を知ること
- ・世界の現状や歴史などを知ること
- ・お互いの文化に興味をもち認め合い、国際問題を解決していくこと
- ・外国人とか日本人とかを分けずに地球を一つの単位と考えること
- ・それぞれの国の文化や習慣や考えを学んでコミュニケーションを図る
- ・民族、文化、生活習慣、価値観の違いを理解すること
- ・宗教 ・戦争 ・文化摩擦
- ・海外の人との文通

<この授業で学びたいこと>

- ・他のアジアの文化や歴史についてや日本とのつながり
- ・ヨーロッパなどの国の習慣や食文化、日本との違い
- ・日本で起こった戦争、研究旅行（沖縄）に関する平和学習
- ・今起きている世界の問題
- ・貧しい国々の人達（特に子ども）のこと。ただ学ぶだけでなく役に立つようなこと。
- ・海外の高校生についてや海外の問題点
- ・世界のなかでの日本の役割
- ・国際協力のあり方
- ・移民と戦争 ・戦争被害
- ・宗教対立 ・人種差別

<どのような方法で学びたいか>

- ・ディスカッション
- ・映画、ビデオ
- ・学外講師による授業
- ・自由研究
- ・インターネット
- ・フィールドワーク
- ・海外の高校生との交流

3. 授業の構成

(1) 授業の導入

生徒参加型の授業を目指し、要望の高かった自分の興味にそった自由なレポートやディスカッションを毎時間の授業内で活かす方法として、授業の最初

に生徒持ち回りの2つのコーナー「ニュース・レビュー」「私の1冊」（各3分程度）を設定した。それぞれノートを1冊ずつ順番に回し、各コーナーで当番の生徒に発表させた。

ここでは幅広くいろいろな観点から世界の問題を取り上げ視野を広げること、自分の考えをクラスに発信することに慣れクラスディスカッションにスムーズに入っていけることを期待した。

<ニュース・レビュー>

最近のニュースから国際理解と平和に関することで、自分が気になったものを紹介。ノートに新聞記事の切り抜きを貼り、感想を記入させた。発表では内容の紹介だけでなく、解説や選んだ理由などコメントを述べさせた。

他の生徒からの質問や感想を聞いた後、教員から解説の補足やコメント、アドバイスを加えた。

例 ; 沖縄米軍基地問題

ペルー人質事件のその後

トルコの子どもの日

核廃止条約

インターネット

子どもの国籍問題（在日外国人の子ども）

ワシントン条約（象牙の取引）

愛知万博

カンボジア情勢

アイヌ新法

北朝鮮問題

ダイアナ妃死去

マザーテレサ死去

北朝鮮より日本人妻里帰り

沖縄の米軍基地と核兵器

長野オリンピック

ダイアナさんと地雷除去

中国残留孤児

米中対話

クリントン夫妻の水着写真

期待と不安のバクダッド

沖縄の海上ヘリ基地

<私の1冊>

国際理解と平和を考える上でみんなに推薦する本を紹介。ニュースと同じく内容の要約だけでなく感想や推薦する理由を述べる。

例 ; 河童が覗いたヨーロッパ（妹尾河童）

アドルフに告ぐ（手塚治虫）

わが闘争（アドルフ・ヒトラー）

南アフリカ虹の国への歩み（峯陽一）

アンネの日記（アンネ・フランク）

火垂るの墓（野坂昭如）

アジアの人々を知る本
 多民族社会アメリカのゆくえ
 トレインスポッティング
 コリアン世界の旅 (野村進)
 中国に残された子どもたち
 黒い雨 (井伏鱒二)
 アメリカを愛した少年
 KYOKO (村上龍)
 娘に語る祖国 (つかこうへい)
 ユーゴ紛争 (千田善)
 基地の町 (村上隆)
 父は沖縄で死んだ (太田英雄)
 ももこの世界あっちこちめぐり
 魔術師のくだものづくり
 トットちゃんとトットちゃんたち
 (黒柳徹子)
 この子を残して (永井)
 湾岸戦争
 マザーテレサへの旅
 日本語と外国語 (鈴木孝夫)

(2) テーマ学習

5～8時間で一つのテーマについて知識を得た後に、意見発表、交換、ディスカッションへとつなげたテーマは事前アンケートで生徒からあがったものを中心とし、一方的な講義中心の内容にならないよう配慮した。テーマの提示も映画、学外講師からなぞ、少しでも興味を引くよう変化を持たせた。

取り上げたテーマは以下の通りである。

<1学期>

A) 人権・差別について

導入；映画「遠い夜明け」

1970年代の南アフリカが舞台。

アパルトヘイトに抵抗する黒人指導者ビーコと白人新聞記者の実話をもとにした映画

展開；映画の合評会

講義 アパルトヘイトとは

黒人意識運動とは

→差別の実態と背景を知る

南アフリカの歴史と現在

1995年の新憲法

南アフリカでの体験談

(受講者に父親の関係で1年間居住した生徒1名、他学年に母親とともにNGO活動で1年間滞在した生徒)

グループディスカッション

全体ディスカッション

「なぜ差別が生じるのか」

「自分の中の差別」

「差別をなくすには」

B) 異文化理解

導入；留学生を招いて

(名古屋大学教育学部教員研修生6名)

2回来校

中国、フィリピン、ラオス、マレーシア、メキシコ、ペルー

展開；グループ別交流会

生徒の希望により興味関心のある国の方とコミュニケーション

グループ学習

交流をもとにして文献やインターネットを利用して対象国を調査

レポートの作成

報告会

グループ学習まとめをクラス発表
 ディスカッション

「国際理解とは何か」

「国際感覚ってなんだろう」

学外講師の授業

マリア・アントニア先生

(日本メキシコ学院)

メキシコ文化の紹介

<2学期>

C) 国際協力、国際援助

導入；国際協力事業団高校教師海外研修法国

(ヴェトナム)

展開；クイズ

ビデオ

ディスカッション

D) 人権、平和

導入；映画「シンドラーのリスト」

展開；地理的なもの歴史的背景について講義

アウシュビッツ収容所の写真集を見る

ディスカッション

E) トットちゃん企画

導入；「トットちゃんとトットちゃんたち」の読書会

展開；ビデオ

「誰も見なかった中国」

「マザーテレサ」「人間の大地」読書会

感想文、意見交換

次の項では、これらテーマ授業のうち各責任担当者から1例ずつ詳しく授業内容と生徒の反応を述べる。

4. テーマ学習の授業内容

4. 選択総合人間科 高校2年選択総合人間科「国際理解と平和」授業実践

(1) 国際協力、国際援助（担当：楨本）

人間と自然、社会の関わりを地球規模で考え理解し、自らの行動規範に結び付けていこうとする総合人間科の理念は開発教育に通ずるものがある。1995、1996年度の必修総合人間科の実践の中で、フィールドワークとして国際協力事業団への訪問と東海北陸地区高校生ODA実体験プログラムへの参加の機会を得た。また、1997年度国際協力事業団主催の高校教師海外研修の一員としてベトナムにおいて国際協力の現場を目にすることができた。こうした研修から開発教育の手法を学ぶことができ、自分の眼で見た途上国と日本の援助の実態や問題点を選択総合人間科「国際理解と平和」の授業の中で生徒とともにディスカッションする教材として活かすことを試みた。

特にベトナム研修旅行体験を中心にして6時間の「国際協力、国際援助」の授業を実施した。その前に異文化理解をテーマに日本が援助をしている6カ国の人から直接生活の様子や日本の印象などを伺っていたので、スムーズに国際協力のテーマに移行できた。

①事前学習（1時間）

「なぜ、援助を？」

国際協力事業団のパンフレット（「地球の明日を見つめて」「いま私たちにできること」）をもとに基本的な開発途上国への経済援助の仕組みを講義した。日本の開発援助の理念や仕組みについてはほとんど何も知らない生徒が大半で、ODAという言葉の説明からする必要があった。

参考図書；「異文化との接点で」時事通信社「バングラデシュを救う9つの方法」

『南北問題と開発教育』（亜紀書房）に紹介されているワークショップを利用。これは昨年度生徒とともに参加した国際協力事業団の高校生ODA実体験プログラムの中で行われ、生徒達にたいへん好評だったものである。その時のことを紹介しながら実施した。国際協力を考える上での視点が多様であること、一つの答えがあるわけではないことを実感させることを目的とした。

参考図書；「開発教育のすすめ」かもがわ出版「新しい開発教育のすすめ方」

古今書院

夏休み前の1時間を用いて実施した。説明に時間がとられ、ワークショップに十分な時間がとれなかったことが反省点である。2時間は用いるべきであった。

②途上国の実態－ベトナムの場合（3時間）

研修旅行の報告をしながらかアジアの実態や国際

援助のあり方を考察した。

<1時間目>ベトナムって？

ベトナムから連想することを一人一人に聞いてみるが、生徒達にとってはベトナム戦争も生まれる前のことであり映画ぐらいでしか知らない。ある世代の人が持つ特別な感情は理解できない部分が多い。40代後半の社会の教師からベトナム戦争当時の日本の若者の状況を話してもらった。

参考図書；「戦場の村」本多勝一朝日文庫

ベトナム戦争写真集

「ベトナムクイズ」

クイズ形式でベトナムの地理、歴史、自然、文化を簡単に紹介

- a) 首都は？
- b) 主食は？
- c) 米の輸出は世界第何位？
- d) どこの植民地だったか？
- e) ベトナム戦争ではどこどこが戦ったのか？
- f) 海岸線に生える林は？
- g) 女性の着ている民族衣装の名前は？
- h) このアオザイの仕立て代はいくら？

……

写真や民族衣装アオザイや茶など実物を提示し、正解者にはベトナムみやげのお菓子を配った。

<2、3時間目>ビデオを見ながら

街の様子や子ども、学校の状況をビデオを見せながら紹介した。協力現場で働く人達が語っていたことや自分自身が感じたことをコメントした。

生徒の感想から

- ・ベトナムについて先生から話を聞く前に知っていたことは道路にたくさんのバイクが走っていることや、都市ホーチミンの名前だけでした。まず一番に、国としては貧しいけれど民衆の経済力は豊かで市場にはたくさんの食べ物があふれているということにびっくりしました。やっぱり南と北で貧富の差が激しいということが問題だと思う。ビデオを見て国風がいいのでいつてみたいと思った。
- ・大学も家が裕福でないとなかなか入れないということなのでこんなに熱心な人達がたくさんいるのもっと多くの人が教育できるようになったらいいなと思った。ビデオを見て、小さな子ども達が新しいもの、珍しいもの（ビデオなど）にとっても興味を持ち、たいへん好奇心が旺盛という感じを受けるので、それを生かしてあげたらいいなと思った。
- ・ベトナムの人々はとても勉強熱心でとても驚

いた。そして、これからはもっともっと豊かな国になっていくと思う。芸術面でもっと豊かな国になれば人々の心にゆとりができると思う。やっぱりこれから注目すべきなのはアジアであると改めて思った。

- ・ベトナムという国なんて、名前しか聞いたことがなくて、自分のなかでこういう風かと思っていて。でも、先生の話とかビデオとかを見て、少しだけベトナムの生活とかを知って、なんか日本とか違っていいなと思った。私は日本にしかいたことがないから他の国のこととか全然知らなかったけど、ベトナムを少し知って他の国もどんな風に生活しているのか知りたいと思った。
- ・日本は多額の援助金を使っているけど、無意味な橋の建設など、有効に使われていないと思いました。豊かな水田があるのに手作業ではいつまでたっても国は豊かになれないでしょう。日本とベトナムはもっとお互いのことを考え、理解する必要があると思いました。
- ・援助のことで日本のことを信じていないのはやめてほしいと思う。
- ・アジアを日本以外は発展途上国だと決めつけているのは嫌いなので、上に立った気分の日本人が嫌なので、アジアを考えることはしなかったし興味ないけど、生きがいのある生活を送っていると思う。日本はヤル気のない人間ばかりになったので情けなく思う。
- ・発展途上国について「面白い」というのは不謹慎なような気もするが、面白いと思った。私は生まれた時から(ベトナムなどに比べると)とても豊かだったと思う。それは金銭や物にしてもそうだが、まだ法律もしっかりしていないなんて信じられないし考えられない。そういう国に行ってもその国を整備したり、様々なことを教えることが面白いと感じた。また、その国へ協力しに行くのも大切だが、先生のように協力隊や国の様子をみんなに伝えることも大切だと思った。私も将来海外協力隊に参加したいと思ったが、特技がないので、どうしたらいいのだろう…。

③ディスカッション (2時間)

「豊か」とはどういうことだろうか？

- ・今の日本は豊かといえるか？
- ・いわゆる発展途上国にとってどのような開発が豊かさにつながるのか？
- ・「国際協力」や「国際援助」はどうすすめたら

よいか？

④2学期中間テスト (資料参考)

生徒の解答から国際協力や国際援助、開発途上国への考え方を抜粋して紹介する。

<援助内容の優先順位> 中間テストIから

D; 9人

- ・アジアは日本と貿易関係にあり、孤立してはいるが日本もアジアに属する。友好関係を築くために重要。先進国で物質的に恵まれ急成長した日本にはこうした援助は重要。
- ・同じ地球に住んでいる子どもたちが病気や飢餓とかで命を失っていくことは本当に心が痛むし、もし自分がその立場にいても「助けて!」と言いたいと思う。
- ・経済発展のため貧しくても安定した社会に援助するより、本当に困って貧困で餓死してしまう国に援助すべきである。貧しいからといって不幸とは限らない。安定した生活を壊して世界を経済競争させようとするのは望ましくない。
- ・援助は最低限するだけでいいと思う。援助を頼りにしないように、でも人の命が危ういときは援助すべきである。死んでしまっただけは何の意味もないと思う。

A; 3人

- ・役に立っていないような国益目的の援助ならしない方がいい。相手に負担をかけるだけだから。
- ・途上国の自立に役立っているわけでもないのに援助するのはおかしい。その分日本の福祉にもっと力を入れるべき。

B; 3人

- ・やはり日本のお金なので使うべき。いくら日本が豊かで経済大国とはいえ、山ほど問題はあるはず。日本の若者が外国について学ぶことは国際化になるにつれ必要なこと。
- ・知識を持った人間が育って、その人がその国に行き力を貸した方がお金や施設、物を渡すより力になると思う。

F; 3人

- ・アフリカの子どもたちはみんなすごく勉強がしたいんだと思う。その子たちが大人になったとき字が書けないとやっぱり社会に通用しない。小学校は絶対に出ておく必要がある。

<日本の政府開発援助の問題点>

- ・はっきり言ってお金だけをばらまいたって良い方向へと解決するわけがない。

4. 選択総合人間科 高校2年選択総合人間科「国際理解と平和」授業実践

- ・日本の考えを押しつけるのではなく、両国が考えを出し合って受け入れ国側の主体的責任によって行われることが大切であり、ヴェトナムのビデオにあった橋はそれを表している。
- ・例えば発展途上国の貧しい地区にいくらコンピューターやハイテク機器を援助しても仕方がない。援助すると言ってもその援助による日本の利益を中心に考えている気がする。
- ・「援助してやった」的な態度をつい取ってしまっていると思う。日本だってアメリカに援助してもらって成長してきたのだからそのお返しというか当然のことだと思う。
- ・援助しすぎて相手国が援助に頼ってしまっている。
- ・米作援助に消極的。これは日本の農業を保護するためだろう。援助は道徳的な立場から国益に優先して行うべき。

＜こらからの日本の開発援助のあり方＞

- ・援助とは単に物や金を与えることではない。確かにそれも必要だが、それでは途上国は援助に頼り自立できない。本当に困っている時に物の援助だけでなく心の援助もするべきだと思う。
- ・相手国からの「要請主義」から「共同形成主義」に変わったので無意味な援助から実際に役立つ援助にすべき。本当にその国の人が喜んでくれるなら日本国民も惜しまず税金を払うようになるかも知れない。
- ・援助を武器にするのはどうかと思うが、大人の社会では仕方がない。一番クールなやり方なのかと思ったのでそこは改善せずに、もっともっと国民の関心が高まるよう、意見を聞いて役所と国民と一緒にやっていけば良い。
- ・自分たちの都合しか考えていない国だなあとつくづく思う。日本が、アメリカなどと言っているからたいした援助ができないのであって、豊かな国がみんなで協力すればもっとまともな援助ができるのではないかと。海外に対して恥ずかしい行為だけは政治家さんにやめて欲しい。
- ・日本は対外的に気前良く援助の約束をしていい顔をしがちだが、まず日本の国民に「どこの国にどんな援助をどのようにするか」を発表し、しっかりとした意味のある援助をしなければいけないし、ボランティア活動と同様に「してあげる」ではなく「自分のためにする」という精神で援助し、利益を目的にしてはいけない。
- ・貧しい国にどんどん援助すべき。そういう助け合いから世界平和は始まると思う。
- ・金や物質の量ではなく質。技術をもっと伝える

べきで、人と技術の交流を盛んにする。

(2) 人権・平和 映画「シンドラーのリスト」を教材とした授業 (担当 川田)

授業のねらいは比較的自由に設定することができた。28名1クラスの授業は立ちどまることも、方向を変えることも自由である。

人権をテーマとする社会科の授業との比較すると、

社会科	総合人間科
学習指導要領	
教科書	
受験教育としての役割	
評価の客観性への配慮	
複数クラスの進度	
本校の学年別の必修総合人間科と比較しても、	
必修	選択科目として
研究委員会の決定	
学年別の助言者の意見	
学年会の総意	重荷から解放されている。

この選択総合人間科では、3人の担当者のバトンタッチ形式での授業づくりがおこなわれた。他の教師の主催する授業に参加しながら次の自分の授業を構想するのはおもしろい体験であった。

生徒たちが楽しく学べ、全員が発言でき、そして行事型の授業の後としての、静かに映画を見て感想を述べあうような形をねらうこととした。

映画は気ままで涙もろいものであるから、見終わった後には、理性的かつ客観的な後半の展開を心がけた。

授業はまず映画「シンドラーのリスト」“SHINDLER'S LIST”を見ることから始めた。第二次大戦中のナチス占領下のポーランドで、ドイツ人ナチス党員のオスカー・シンドラーは軍需工場を経営する。シンドラーは低賃金のユダヤ人を使い巨利をあげ、ユダヤ人はシンドラーの工場で働くことにより強制収容所での死をまぬがれる、といった内容である。

「一番印象に残っていることはどんなことですか。」

「映画の訴えたかったものは何であると考えますか。」

「いつごろの物語ですか。」

「物語が展開していく場所を説明して下さい。」

「オスカー・シンドラーはどんな人だと思いましたか。」

「強制収容所長のアーモン・ゲートはどんな人ですか。」

「映画を見て真実だと思ったのはどんな部分ですか。」

「真実とはちがっていると疑った部分はどこですか。」
 などであった。

見終わった後の質問と話題は以上である。

生徒のうけとめを調べてみよう。3人の生徒の言葉をそのまま記述する。

A女：平均的な生徒の代表

B女：この選択28名中の知的な面で優秀な生徒

C男：遅れがちな生徒の代表

「映画の訴えたかったものは何であると考えますか。」

A女：あんな残酷なことはもう二度とあってはいけないということを訴えている。平和を訴えたかったんだと思う。

B女：命の大切さ。人間の崇高さ。最後に「この映画を亡くなったユダヤ人にささげる」とあったので、慰霊の気持ちも込められていると思う。

C男：人間という種族で優劣はない。

「おもしろかったのはどんなところですか。」

C男：オスカー・シンドラーがガウンを着てライフルでドイツ人の兵隊をうち殺す所がいろいろ考えさせられておもしろかったです。

(※ガウンを着てユダヤ人を射殺したのは収容所長のアーモン・ゲートである。C男の見誤り。)

精細にとらえたB女も、知識の乏しいC男も同じ音調の認識を示している。映画の空気を吸いこんで、感受性において主題をとらえているからである。

人間愛の奇跡の物語

モーセの出エジプト記

シンドラーの

出アウシュビッツ記

戦争末期の状況 (仮説)

1944年秋、ソ連軍侵攻

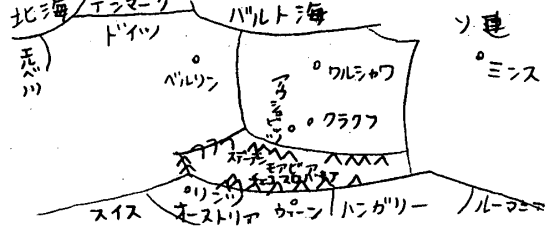
アウシュビッツ収容所は

閉鎖、鉦山への囚人移送

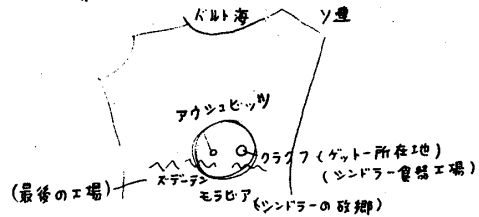
米軍空爆の激化による

工場の山間地疎開

A女：場所はどのあたりですか。略地図をかいて説明しなさい。



B女：場所はどのあたりですか。略地図をかいて説明しなさい。



C男：場所はどのあたりですか。略地図をかいて説明しなさい。

ドイツ

茶髪が半数以上の生徒全員が映画を本気で見ていた。ユダヤ人の生の状況をうけとめていた。そこには認識の転換点となりうる時間の流れがあった。「すべてその通りだと思う」同質的な意見形成の場から何人の生徒がさらに考え深め得たであろうか。映画を出発点とした問題発掘、独自の視点、といった授業の意図は「めんどくさい」「うっとおしい」こととしてそれを意識する生徒の雰囲気と上手く調和しなかった。

生き方を学ぶ総合人間科、とすれば、この授業内容は、生徒の生の深处から発する言葉に寄りそうことができたと感ぜられる。

(3) “トットちゃん企画” (担当: 石川)

①テーマについて

かつての日本では、食糧の基盤となる“村”の掟からはずれては生きてはいけなかった。そのため、一生“村”という範囲以外へ視野を広げる者は少なかったであろう。濃厚な人間関係の中で、村の中で生きる術を親から子へ、長老から若者へと伝えた。

現在は、小さい頃から海外まで目を向け、地球規模で考えることができる視野が広い生徒もいる。しかし一方でクラスや家庭内での人間関係は希薄になり、他の人の状況に関心をもたない傾向が強まっているように見える。あるいは、海外の情報は受け取ってはいても、そこで生活している人々を自分に引き付けて考え、想像する力に欠けている場合も多い。

食糧の問題は生きていく上での、必須の問題であるにもかかわらず、他の教科では継続的に扱うことができないため、この機会を利用して生徒に地球規模で考えてもらうことを目的としている。つまり、現在は、1つの国のレベルで食糧を考えることはできず、日本を含む先進国のライフスタイルによって、多くの国が影響を受けているということを理解して欲しいと考えている。

②“トットちゃん企画”の経過

12月に企画担当生徒4名と内容を検討したのち、代表のTさんが原案とアンケートを作成し、それに基づいて計画を決めた。

・1月12日(月)

飢餓に関するデータの載ったプリントおよび企画担当の生徒が選んだ、『トットちゃんとトットちゃんたち』(黒柳徹子著)の抜粋プリント(10ページ)の読書会

・1月14日(水)

『トットちゃんとトットちゃんたち』の本の抜粋プリントについての意見交換。

企画担当生徒が選んだ『誰も見なかった中国』(落合信彦著)と『アジアの子供たちは今』の抜粋プリントの読書会と意見交換

・1月19日(月)

国際飢餓対策機構(NGOの1つ)から借りたビデオ「明日輝くために」を鑑賞。

フィリピンの小学校やスラムのようすの紹介。

・1月26日(月)

『マザー・テレサ あふれる愛』(沖守弘著)の抜粋プリント読書会。

ビデオ「ベンガル'85」(マザー・テレサ施設内の映像)

・1月28日(水)

前回のビデオについての意見交換

次回の企画の質問を考える。

・2月4日(水)

青年海外協力隊として、パラグアイで小学生を教え、帰国後もスペイン語圏から日本に来ている人々に日本語を教えるなどのボランティア活動をされている中村春子さんを迎えてお話を聞く。

・2月9日(月)

カンボジアでのユネスコの寺子屋運動に参加した本校3年生のAさんと呼んで話を聞く。

・2月16日(月)

国際飢餓対策機構から借りたビデオ「跳べアンデスの子よ」(ペルーの子どもたちのようす)「エチオピアの人々とともに」鑑賞。

・2月18日(水)

『人間の大地』(犬養道子著)の抜粋プリントの読書会と意見交換。

・2月23日(月)

“トットちゃん企画”全体を振り返って全員が感想文を書く。

・3月18日(水)

「総合人間科を通して考えたこと」というテーマで意見交換。

③生徒の取り組みと変容

[1]『トットちゃんとトットちゃんたち』(黒柳徹子著)の読書会と関連ビデオの鑑賞。

代表のTさんが、一年を通して毎時間発表した“私の一冊”にも選んだ本であり、トットちゃん(スワヒリ語で子どもの意味)に焦点があててあるだけに、みんなへのインパクトが強いということで、一番最初にこの本の読書会を行った。子どもの様子が写真入りでわかりやすく書いてあることもあって、全員がとても集中して読んでいた。

読んだ直後の意見交換では“地雷の犠牲になる子どもがかわいそう”“ぬいぐるみに爆弾をしかけるなんてひどい”といったような気持ちを20~30秒で簡単に述べる生徒が多かった。しかし、この企画終了後にまとめの意味で書いたレポートには、以下の抜粋のように、自分なりの観点で、自分なりの率直な表現で感想を書いている。フィリピン、バングラデシュ、ペルー、エチオピアの子どもたちのビデオを見た後は、具体的に自分に引き寄せて考える生徒が増えた。

ビデオには、煙のくすぶるゴミ捨て場の上に住み、そのゴミの山を手慣れた手つきでかきわけながら使える物を捜す兄弟、栄養失調から、骨の変形した子、

全身がしわしわの子、全身がけいれんしている子、泥水をすくって飲む子どもたちなどが映っていて、インパクトが強かったようである。

「私は、どうしてもこの本をみんなに読んでもらいたかった。だから、こういう場がもてたことを本当に感謝している。この本は子どもを通して飢餓を訴えていることがよくわかる。本の中の写真から小さな子どもたちのうるんだ大きな目が、大人たち、先進国に向けて何かを訴えているような気がする。本を読み終わった後は、信じられない状態で、気が重かったけど、“このままじゃ、私自身も幸せになれないだろう”と感じた。」(この企画担当代表生徒のTさん)

「家族が殺された理由を“自分のせいだ”という子どもたち。“ぬいぐるみ爆弾”で殺される子どもたち。売春する少女…いろいろな話があった。貧困と知識のなさ、欲が生み出す戦争。私がここで考えていることは、彼らにとって何の意味があるのだろうか。毎日生き延びるために毎日たたかっているのだ、彼らは。私にいったい何ができる？ ボランティア活動するとか？ 私はいつも忘れそうになる。自分よりずっと貧しくずっとつらい思いをしている人々がいることを。今の自分を、日本を、世界を考えてみたりする。そして、これではいけないと思う。平和に見えるこの国だって忘れてしまったことや危険なことだっていっぱいある。」(K. Kさん)

「プリントを読んで、すごいショックを受け、石川先生に本をお借りして、1冊全部読みました。なぜショックを受けたかというところ…私は今まで、飢餓というものを、その実態をほぼ何も知りませんでした。そして、飢餓について読んだのがこの本だったので、何もない、真っ白な状態から、ショッキングな事実を知ったので、さらに大きなショックを受けたのだと思います。

今まで、これだけのことを知らなかったということもショックでした。しばらくは、飢えた子どもたちのことばかりを考えていました。」(Dさん)

「子どもたちに足りないのは、食料だけでなく愛情も足りないということを知った。ビデオで見たようにやせ細った子どもたちがほったらかしにされていて、その子どもは、どんな気持ちができるだろうと考えた。何かよろこばせてあげることをしてあげたいと思った。」(Iさん)

「文中に何回か出てきた“罪のない子どもたち”という言葉は考えさせられるものだった。私たちと同じように、同じ人間として生まれてきたのに、なぜ、“罪のない子どもたち”があれほど苦しまなくてはならないのだろうか。生まれた場所によって、どうしてこんなに違うのだろうか。あの子どもたちの問題は私たちの問題でもあるのだ。私たちも生まれた場所によってはあのようになっていたのだから。」(Oさん)

「自分のことじゃないと思ってしまったことが少しはあった。自分にもおきないことじゃないということも少し思った。どうしたらいいかとも考えた。けど、僕には、あの子に何をしてあげられるかわからなかった。けど、授業をやっていく中で、この子のような子を増やさないようにすることはこれからの中で、何回かあると思う。その時には、何かしてあげられるかも知れない。今は僕がガキだから、何かする力はないけど、大人になれば、少しは役に立つ力もついているかも知れなし、その時までには何ができるか、ためておこうと思った。」(Hくん)

【2】『マザー・テレサ あふれる愛』(沖守弘著)の読書会とビデオ鑑賞

マザー・テレサに興味をもって自分でも本をもっていた企画担当生徒のWさんが抜粋プリントを作成した。訃報が新聞に載ってからあまり日にちがたっていないなかったことや、ビデオの中の多くの孤児たちや、「死を待つ人々の家」の中のやせこけた人々の映像と抜粋の内容が一致したために、多くの生徒が興味を示した。以下は企画終了後に書いたレポートの抜粋である。

「私は、以前からマザー・テレサのことはよく耳にしていたのですが、マザー・テレサがどんな人で、どのようなことをしている人かはほとんど知りませんでした。このプリントを読んで、印象に残っていることは、『私は、私にできることをしているだけです』という言葉です。私はマザーと同じことは決してできないと思います。そして、私にできることとは何なのか考えさせられました。」(Fさん)

「びんぼうでくるしんでいる人には、耳をかたむける。日本は心がまずしい国だ。この2つが僕にとって印象にのこっています。マザーは誰にでもとてもやさしい。なんか、ともに生きるというかんじがする。人間は一人では生きられない。そんな言葉をあたりまえのように思っているマザー・テレサを、人間の領域をこえた神のように思えた。しかし、とおい昔

は、ともに生きるという気持ちがなければ生きれなかった。人間の心のLEVELが低下したみたいだ。だから、マザー・テレサは縄文人のころをもつ現代の神である。」(Gくん)

“困っている人はとにかく助ける”という一貫した姿勢は、理解しやすかったようであるが、上記の他にも、“僕では、まねできない”“私にはとてもじゃないけどマネできません”という表現が多く見られた。

また、“困っている人はとにかく助ける”という姿勢にたいして、「ちょっとその人を甘やかしているんじゃないかと思う。いつも頼めばもらえと思う心を身につけてはいけないと思うから」(Yさん)という考えや、「私はマザー・テレサを尊敬している。それは、物をあげるだけにしないところである」(Kさん)ととらえる生徒もいた。

[3] パラグアイでの青年海外協力隊の活動の説明(中村春子さん)

事前に考えた質問には、「なぜ、青年海外協力隊に応募したのか」という動機や「現地の子どものための活動の内容」についてが多かった。この生徒のこれらの質問に沿いながら、たくさんの写真を実物投影機で写しながら説明していただいた。

その後の質問では、「マザー・テレサは困った人には、食物をあげるのに、どうして、物乞いの子には何もしなかったのか。」という問いに対しての「そこで、ずっと本当にその子のためになることをしてあげられないから。」というやり取りが印象に残った生徒が多かったようである。

また、「どうやってボランティアをしたらいいですか?」という質問に対しては「とにかく、まずやってみることで。ここにはできません。」という明確な返事があり、ボランティアの仕方は人から教えてもらうのではなく、自分で考えるのだという、実際に活動されている方からのメッセージはインパクトがあったようで、このあたりから、“援助の仕方”について考える生徒が出始めた。以下は感想の抜粋である。

「物ごいをする子どもに対し、きっと中村さんは何か助けてあげたかっただろう。しかし、その子どものためにできることは、“自分で何とかする”ことを身につけさせることだったろう。“与える”ことが援助ではなく、“自分で切り開いていく力”を身につけることが本当の援助だ。そのために私たちも、今何かできることをすべきだ。ボランティアについて知ることも1つの方法だ。」(K. Kさん)

「私は、司会をやらせてもらって、ボランティアのこと、ストリート・チルドレンのことについて、たくさん質問ができた。最初なぜ中村さんは、ストリート・チルドレンに何もしてあげなかったんだろうと疑問に思ったが、それが、その子のためになるわけではないと聞かされたとき、“ハッ”として、自分がその子にとってとても上の立場で接していたことがとても恥ずかしくなった。

最後にボランティアは、“やってあげたいと思うより、やりたいと思うことが大切”という言葉が深く印象に残っている。」(Tさん)

[4] 3年生のAさんのカンボジアでの寺子屋運動について

新聞売りの子がずっとついてきた話、手を合わせて“ミャンミャン”(むしゃむしゃ)と食物をねだったりする子の話、教師の80%が殺されたことなどを同年代の同じ学校の生徒から聞くことができたことは、今まで、“この人たちは偉いけど自分にはできない”と言っていた者にとって励みになったかと思う。「援助物資がけっこうあって、キティーちゃんの筆箱がはやっていた」などというエピソードなども身近だったようである。

「手足がなければ恵んでくれると思って自分の子どもの手足を切り落としてしまうのには驚いた。貧困というのは人間の性格や考え方までもおそろしくしてしまうのだとわかった。」(K. Kさん)

「戦争の後がまだ生々しく残っていたということと、勉強が楽しくてしょうがないということがすごく印象的でした。それから、みんな純粋で、笑顔がすごくかわいいということ。日本の子どもよりも生活はまずしくても、内面的には、すごく豊かな心なのかもしれないと思いました。」(Mさん)

「『教育を受けているから夢がもてる。教育を受けない子は夢などもっていない。』という言葉が非常に心に残っている。私たちの中には、当たり前のように教育を受け、それをむりやりやらされていると感じているひとも少なくないようだが…」(Oさん)

「大学では心理学を学びたいと思っていたけれど、カンボジアから帰ってきたら教育学部に進路変更したという話を聞いた。現地の純粋な子どもたちと出会って、今の自分、学校教育を考えてみようと思ったという。長い間抱いていた夢を実現し、未来に目をむいていてとても心打たれた。」(K. Kさん)

「第一印象はAさんは、どちらかというが目立たない人だったけれど、この話をしている時はとても楽しそうにイキイキしていた。本当に好きなことなんだろうなと思った。僕もそんなふうにイキイキと夢中になれる何かを捜し、見つけてやるゾ。」(Kくん)

[5]『人間の大地』(犬養道子著)の抜粋を読んで、「援助の仕方」について考える。

抜粋部分は、インドで、ある神父さんが、村の人々と生活をともにして、彼らが井戸を本当に欲しがるまで待ち、自分たちで修理のできる手作り井戸を掘り、生活が向上していく話とサハラ以南の牧畜地に当時最新式だった深井戸を掘り、水が一ヶ所に集まってしまったために、他の浅井戸が枯れ、遊牧民が密集し、草もなくなり、家畜を失っていった話が載せてある。

Kくんのように、「この神父さんのおかげで、これだけ進歩しても、その間に日本とかはまた、進歩しているから、差は縮まない。」と発言した生徒もいた。

一方で、これを読んで「援助の仕方の教科書のようにだ」と書いた生徒もいた。もちろん、援助の仕方は、その都度異なるので、教科書はない訳だが、彼女にとっては、「自分が模索していた答えをみつけた」ような気がしたのではないかと思う。多くの生徒が自分なりの考えをもちはじめた。

「私はこの神父さんに感動した。本当にこの人こそが本当の指導者と呼ばれる素晴らしい人だと思った。最初から先進国の発達した機械をばんと置いたって何の開発にもならない。開発とはまず人々の心を開発していくことではないかと思った。」(Fさん)

「最近、思っていることだけでも、勉強をする時、ほんとうに勉強をしたいと思ってする勉強といやいやする勉強(宿題のような)では、得ることに差があると思う。それと同じことが開発にもいえるのではないだろうか。自分たちがこうしたいと思ってはじめて、自分たちがたずさわっていく開発と先進国がお金にものをいわせて、上からあたえる開発とでは、得るものの差ができてとうぜんだと思う。」(Yくん)

「…ここまで考えたやさしさは、とても素晴らしい。(このやさしさは、すべてのものにあてはまるのかな)」

これらのように、飢餓問題を、人の心と結びつけて考えたり、開発を勉強と結びつけて考えたり、多角的に考えられるようになってきた。

一部の者であるが、自分たちを含む先進国がこれらの飢餓を引き起こしているという観点から考え始めた生徒もいた。

「この本もお借りして読みました。トットちゃんの時よりも、さらに、ショックを受けました。プリントの内容は、「神父はすばらしい人で、賢明な処置をして井戸ができた。すごいなあ。」としか思いませんでした。だから軽い気持ちで本を開いたのですが、軽いどころか、読み始めてからずっと私の心に重く沈んでいます。それは、先進国の私たちがあの飢餓を作り出していること、そして、そのシステムが世界的なスケールで書かれていた。この悲惨な状況づくりに私も一役かっていたなんて!!それがショックでした。」(Dさん)

「僕は今まで世界中で飢えて死をむかえるひとが出るのは食料の生産量が世界中の人々の需要を下回っていて、その少ない食糧を先進国が買いあさってしまうのでおこるとばかり思っていました。しかし、それはまちがいで半分しかあっていませんでした。すべての人々が食べることができるだけ十分な食糧を先進国が買いあさる、そのために起こる発展途上国の飢えの問題。その責任をまちがった方向で先進国はとろうとしています。」(Yくん)

[6]“トットちゃん企画”全体の感想文と“総合人間科を通して考えたこと”についての意見交換。

“トットちゃん企画に参加したことによって、毎日の生活の習慣や価値観の変化はありましたか。あるいは、今後、自分が毎日の生活の中で気をつけていこうとしていることは何ですか。今後の飢餓問題や発展途上国への援助に、自分自身はどのように貢献できると思いますか。”という質問に対してGくんは、

「僕の中で“トットちゃん企画”は“知る”までだから、僕はそれによって何かをかえたりしない。ここに書いてやらない自分の方が、今のじぶんより恥ずかしい」と書いている。しかし、最後の意見交換では、「今まで、沖縄への研究旅行とか行って平和について習ったけど、(この企画に参加して)、平和というのは、戦争がないだけではないんだなあと思った。飢餓問題も平和なんだと思った」と発言した。

“自分には関係ない”“どうせ何もできない”というような発言が多く、他の女子のメンバー数人から、

“まじめに考えていないから怒れる”とクレームがくるほどであったが、自分なりの平和の概念を改めて考え直すきっかけにはなったようである。

同じような発言が多くみられたJ. Kくんは、最後まで、「そこに生まれたのなら運命として受けとめ他の国に頼るな。…最善最速の方法として、子どもを生まなければよいのです」と書いている。

Nくんは、「毎日の生活などはまったく変わらない。僕も毎日楽しく過ごすのがせいっぱいだから他の人のことを応援するようはない。での将来もし立派な大人になれて、経済的によゆうとかができたしたら、応援したいと思う。」と書いている。

彼らは、真冬の1限目ということもあって、遅刻と欠課が多く、この企画の3分の1近く休んでいる。できれば、もっとまじめに考えている生徒の怒りをぶつける場があるとさらによかったのではないかと思う。意見交換といっても、自分の意見を発表して、一巡すると20分ほどかかって時間がなくなり、他の人の意見に対して反論を述べるところまでの議論はできなかったのである。

しかし、以下の抜粋のように、多くの生徒の中に、実生活と結びつけて考え、自分のできることを模索していこうという姿勢が見られる。

「小さいときに、食物を残すと、親に、アフリカの子たちは食べたいのに食べられないのだから、食べられるあなたは食べなさいと言われた意味がわかった。」(Kくん)

「今日食べているお肉や牛乳にどれだけの穀物が使われているのか意識して、苦しんでいる人たちに手をさしのべれるようになりたい。」(I. Kさん)

「今まで別に興味がなかったのにTVのニュースで地雷のこととかをやっていると気にとめるようになった。」(Yさん)

「『あつ、今の水出しっぱなしでトットちゃんは何人助かったんだろう?!』と思う。すごく気にかけているのだけれど、今の現状で今の私に一体何ができるんだろうとすごく、すごく悩んでしまう。今の私は、トットちゃんの本を読んで、ただ憐れんでいるだけ人間だから、私が得た知識を人に伝えることしかできないだろうと思う。」(Tさん)

「基本的に、習慣、価値観には何も変化はありません。しかし、実態を知って、前よりは、何も感じなかつ

たことに対して考えるようになったりはした。」(R. Kさん)

「最近コンビニエンスストアの募金箱におつりを入れるようになった。そんなことで発展途上国への援助になっているかわからないが、とりあえずしている。」(Yくん)

「変化はあった。1円とか10円とかだけ募金するようになった。それとなぜかあまり関係ないけどゴミのポイすてをしなくなった。あと僕は特別な知識も並の知識もないから、援助に行くことはできないけど、ムダなことはやめて、少しでも、小さいことでもいいから協力する気持ちを忘れたくない。自分にも良いことなのでできるだろう。」(Kくん)

「トットちゃん企画をやった良かったと思う。外国で飢餓や戦争で苦しんでいる人たちを知っているのといないのでは、自分の考えや行動も違ってくるし、広がってくる。」(K. Kさん)

「今までも、食物を捨てたりする時は“もったいない”という気持ちがあったが、今は“申し訳ない”という気持ちに変化した。ことあるごとに飢餓について考えている。たとえば、必要性を感じない、莫大な費用を使つての工事。“これ、まずい”と言って平気で食物を残す友達。ニュースで見たあきれるほどの給食の残飯。これだけのお金で、何人の人が助かるんだろう。…どの本を見ても必ずと言ってよいほど書かれているのが“途上国に植林を!!”ということだ。木がなければ、すべての生活ができなくなるらしい。燃料や肥料、木の実やそこに住む動物、果ては水を得る。森は様々な機能日をもっている。日本は、植林を計画していくべきだ。…これから先もこのことはずっと心にとめておきたい。せつかく事実を知ったのに、忘れてしまったり、目をそむけたりしたら申し訳ないと思うから。授業を離れても、個人的に飢餓についての問題は勉強を進めていきたい。」(Dさん)

④ “トットちゃん企画”を振り返って

朝、何気なく、コンビニエンスストアでお弁当やジュースを買い、部活が終わればまた、コンビニエンスストアへ寄る。友達との“遊び”で気軽に食べ歩く生徒。担当する私自身も、食べる物に困った経験はない。担当生徒とは、どうしたら飢餓の問題を身近に考えることができるかという点を相談した。

いろいろなアイデアが出て、“一日絶食して飢餓を

体験する”という案もあったが実現しなかった。かわりに、文章だけでなく、映像も取り入れるようにして、NGOの団体から無料で借り受けて鑑賞した。

毎回、視聴覚室で少人数で授業が行えたメリットは大きい。ビデオのみならず、常設してある実物投影機を利用して、写真、パンフレットなどを大写しすることができた。

もう1つ“子ども”になるべく焦点を当てた。自分より小さい子どもたちが、手慣れた手つきでゴミをあさる姿や、泥水を運ぶようす、家畜の糞を手でこねて壁に投げつけて燃料を作る姿などは印象に残ったようである。

また、実際に現地に行ったことのある人に話しをしてもらいたいという希望が多かった。週2時間とも1時間目で、多くの科目が連動するので、時間割変更はできないという厳しい条件の中で、本校教員のご家族の方とすでに推薦入学で進路の決まっていた3年生の生徒にお願いした。

はじめのうちは、驚いた、かわいそうという程度の感想であったのが、次第に多角的にとらえるようになり、飢餓問題を解決する方法を考えたり、原因を考えたりと広がりや深まりをみせていった。

しかし、半数は遅刻、欠席が多く、メモとらない生徒であることは最後まで変わりなかった。そういう生徒たちが、自分のことしか考えていないような発言をすることもしばしばあったが、それをその場で直させるようなことはしなかった。あくまで、まず事実を知ってもらうことを重視した。いろいろな本、ビデオ、パンフレット、人の話から事実を自分で導き出して欲しいと考えた。この授業で、単に「飢餓で苦しむ人がいることがわかった。かわいそうだ。募金しよう。」という型にはまった結論や、「これから、私も気をつけていきたい」などという、あいまいで無難な表現でくくって欲しくはないと考えた。

最後まで、同じような発言をしていた生徒たちも、紙に書くと、その考え方が望ましいか、望ましくないかは別として、自分なりの表現で自分の気持ちを書くことができた。かつては、意見を求められても、一言で終わったり、“別に何とも思わん”と言っていたことから考えると進歩かも知れない。

今後、飢餓問題の解決には、現在の快適なライフスタイルを手放す覚悟が要ることや、経済面、政治面などさらに多角的に広く考えていく必要があることに気付いていってくれることを願っている。

5. おわりに

1997年度の高校2年選択総合人間科「国際理解と

平和」は、多くの学外講師の方の協力を得ることができ、またインターネットなどの利用にもより、かなり開かれた教室となった。名古屋大学教育学部の附属ということで留学生へのアプローチが比較的容易であった点はあるが、どの学校でもどの教科においても、広く社会に人材を求めてきた学習が展開できる可能性を強く感じる一年であった。

生徒達のプレゼンテーション能力やディスカッション能力を十分に引き出せなかった点や、最終的に目指した各自の興味関心に基づいた個人研究に至らなかった点など課題は多いが、現代社会の抱える総合的課題の共通認識や世界に目を向ける姿勢は育ってきている。

最後に教室に足を運んで下さった講師の方へ深く感謝したい。

高校2年 選択総合人間科 国際理解と平和 2学期中間テスト 1997/10/18

- I 日本の政府開発援助ODA額は約100億ドル、国民1人あたり約1万円に相当する。「外務省では今年の援助予算約1兆2千億円のうち、100億円が予算未消化で残ってしまった。いつもならお役所仕事で適当に配分するのだが、近年はODAに対する関心も高まり、今年は広く国民に100億円の使途について意見を求めることになった。」と想定して、次のようなA～Iの援助内容について優先順位をつけて、解答欄に記号で答えなさい。また理由を述べよ。
- A) 援助しない
援助は政府を通じて行われるので、開発途上国の権力者や特権階級を豊かにするだけで、現地の住民に届かない。さらに援助は実は日本に利益が還元されるだけで途上国の自立に役立っているわけではない。日本国内の社会福祉のために回した方がよい。
- B) 日本国内での使用
援助はするが、日本の若者が途上国の学校で学んだり農村や街の生活を体験したりボランティア活動をするための奨学金に使う。そのようなプログラムのあるNGO（民間協力団体）への資金援助に回す。
- C) アフリカへの援助
国立大学を充実し、学生のヨーロッパ留学の奨学金に当てる。
(低所得国。特権的支配層が政治、経済を支配している。大学進学率は5%。農産物や鉱産物を輸出しているが、日本との貿易は少ない。)
- D) アジアへの援助（その1）
幼児死亡率を減らすため、保健所や上下水道の建設に使う。
(低所得国。民主主義がまだ未熟である。賄賂も少なくない。国内の資源は先進国の食料—バナナ、エビ—や原料—銅、木材—として安い値段で輸出されている。)
- E) 東ヨーロッパへの援助
経済の民主化、市場経済への移行のために使う。
(中高所得国。社会主義政権が崩壊したところ。日本と今まで交流がなかった。計画経済が破綻して、モノ不足、インフレなど経済状況の混乱が続いている。)
- F) アフリカへの援助
小学校（義務教育）の建設と教科書や文房具の支給に使う。
(最貧国。部族社会の伝統が残り民主主義には遠い。小学校就学率40%。粗法的な農業と遊牧に頼る経済。気候変動による飢餓が頻発。)
- G) 中南米への援助
熱帯林の地下に埋蔵されている原油の掘削に使う。
(低所得国。軍事政権。地主、財閥ともに政府を支持している。親日的でもある。世界の石油資本がこの国の石油資源に注目している。豊かな日本が石油を買ってくると貧しい農民の暮らしもよくなる)
- H) 太平洋諸国への援助
先進国から観光客を誘致するリゾート建設に使う。
(低所得国。王、貴族、平民の3身分から社会がなるが、国民は深く王を信頼している。国民は漁業で生計を立てているが貧しい。きれいな海は十分な観光資源となる)
- I) アジアへの援助（その2）
外国企業を誘致するための臨海工業団地の造成に使う。
(中所得国。王政をしいているが政治は安定し、援助効果も期待できる。米作中心の農業国であったが輸出主導型の経済に転換しようとしている。国民の貧富の差が大きい)

質実な援助を考える機会に

政府開発援助(ODA)は厳しい財政状況の下、もはや量的拡大は望めない。しかし、環境分野などメリハリをつけ、質実な援助を考えるにはいい機会である。

六日の「国際協力の日」に先立ち、外務省が発表した「九七年度ODA白書」は、わが国の対外援助のあり方をじっくりと見直し、今後の方向を模索する上、格好の材料を提供したと言えよう。

日本のODAは一九七八年以降、五次にわたり策定された中期目標によってひたすら右肩上がりの拡大が図られた。援助の総量を増やし、それを長く

して逆風が吹いている。田中九六年の実績は前年比約三五%減となり、橋本太郎首相が掲げる財政構造改革によって九八年度予算のODA概算要求も同一〇%減を余儀なくされた。

日本は九一年以来六年連続して米国を抜き、最大の援助供与国の地位を占めてきたが、それも心もとない。

概算要求にあたって、外務省はあえて国連難民高等弁務官事務所を含む国際機関への拠出金を三五・四五%削減した。また、青年海外協力隊員の派遣人員を三百人も減らした。


このように一律削減方式には並行して機関などから再考を求める声が寄せられている。日本に対する期待が失墜に変わり、一転してマイナスの印象を与えては元も子もないだろう。

だが、ここは腰を据え、限られた予算の中で日本にとってODAはどのくらいあるべきか、「量」から「質」への転換を真剣に議論してもらいたい。

政治家や官僚は自分の懐が痛まないこともあってか、対外的に気取った援助の約束をしがちだが、国内景気は低迷している。国民は従来の「顔の見えない援助」では到底納得しきれない。その意味で今回の白書がODAの今後の主要対象分野に「環境」を取り上げ、「人類の安全保障」との問題意識を持ち、重点支援の方向を打ち出したことはみごとだ。

具体的には、深刻化している中国の大気汚染や酸性雨問題解決のための日中環境協力、地球温暖化防止への取り組みだ。後者は特に十二月に京都で開催される気候変動枠組条約第二回締約国会議(COP3)を控え、議長国としての姿勢を対外的にアピールする狙いもある。

もう一つ評価できるのは、効果的援助を実施すべく従来の相手国からの「要請主義」を改め、プロジェクトの「共同形成主義」に転換したことだ。これらが年末の京都会議や予算獲得の便法でなく、質実で戦略性あるODAへの一歩となることを期待したい。

- II 解答欄に世界地図を書き、開発途上国だと思う地域を  で示しなさい。
- III 開発途上国と呼ばれるところではどのような問題が起きていると思うか。考えられることを3つあげなさい。
- IV 日本の政府開発援助(ODA)は、1991年以来6年連続して世界第1位であり、特にアジアでは最大の援助供与国となっている。
 - (1) 日本政府の援助の理念を述べなさい。
 - (2) 日本の援助のあり方で問題だと感じる点を述べなさい。
 - (3) 右に載せた社説(10月6日中日新聞)を参考に、これからの日本の開発援助のあり方についてあなたの考えを述べなさい。
- V ベトナムについて次の問いに答えなさい。
 - (1) 首都の名前を答えなさい。
 - (2) 米の輸出は世界第何位か。
 - (3) どこの植民地であったか。
 - (4) 日本からの青年海外協力隊員はどのような仕事をしているか。
- VI 最近話題になった国際ニュースで印象に残った事柄をあげ、それについて感想を述べなさい。
- VII 2学期の授業の中で紹介された本のうち印象に残っているものをあげ、それについての感想を書きなさい。
- VIII 南アフリカの先生への質問を書きなさい。(できれば英語で)
- IX 後期の授業1時間分の企画を書きなさい。(2人可、3人以上不可)